

## ビハール語 (Bihārī) について

長 田 俊 樹

### はじめに

1988年から刊行が開始され、ようやく世界言語編の全五巻が出そろったばかりの三省堂『言語学大辞典』によると、Bihārī はビハール語として、次のように記載されている。

インドのビハール州 (Bihar) を中心とする地域で話される、インド・ヨーロッパ語族、インド・アリア語派に属する言語群ないしは方言群の総称。

ビハール語は、西のボージュプリー (Bhojpurī), 東北のマイティリー (Maithilī), 東南のマガヒー (Magahī) の3つの下位区分をもつ。言語学者のあいだでは、これらを単一言語の3つの方言と解する立場 (グリアソン Grierson), 3つの言語または言葉 (speeches) とする立場 (ティワリー Tiwari), ボージュプリーは独立の言語であるがマガヒーはマイティリーの下位方言にすぎないとした上で、マイティリーそのものが言語か方言かを明示しない立場 (チャテルジー Chatterji) があり、見解の一致をみない。しかし、今日、これらは、いずれも方言と見なされるのが一般的な傾向である。それは、これらが、研究の対象とされることはあっても教育の媒体とされることがまずないこと、行政の場でも、ビハール州とウッタール・プラデーシュ (Uttar Pradesh) 州の公用語がヒンディー語であって、これらが公用語またはそれに準ずるものとして認められていないこと、などの理由による。

まず第一に、小論はこの『言語学大辞典』の記述から出発し、実際の文献にあたってこの記述を検討する。そして、グリアソンの立場である、ビハール州で話されているボージュプリー語、マイティリー語、マガヒー語を単一のビハール語とまとめることが果して可能なかどうかについて検討を加える。特に、伝統的な系統論の立場から、ビハール祖語をたてようと試みた Jeffers の論文を詳しく検討し、伝統的な系統論からは共通祖語としてのビハール語は成り立たないことを指摘する。この指摘によって、「ビハール語」とは

まったく言語学的には実体のない言語と思われるかも知れないが、決してそうではない。すなわち、インドで実際に Bihārī「ビハール語」というと標準ヒンディー語が簡略化された言語を指し、伝統的系統論の立場ではなく、別の立場からみれば、「共通ビハール語」は存在するということを指摘する。その際、最近社会言語学で使われる用語 koineization「コイナー化」を導入して説明し、最後に筆者の提唱する共通ビハール語が標準ヒンディー語とどう違うのかについて記述を試みる。

## 1. ビハール諸語研究小史

『言語学大辞典』の記述を実際の文献にあたって吟味しておこう。

グリヤソンの先行研究に、Beams (1867) や Kellogg (1875) がある。彼らは、ボージュプリー語やマイティリー語、マガディー語(=マガヒー語)はヒンディー語の東部方言(Eastern Hindi)と考えた。それが、19世紀後半の比較言語学の発達とともに、同じ系統の言語が一つの幹から枝分かれするという系統樹で印欧語の歴史を説明したシュライヘルの系統樹説が現れると、系統を同じくする諸言語を歴史的により近い(つまり、より新しい時期に枝分かれした)と推定できるグループに分類するようになった。こうして Hoernle (1880) は現代インド・アリア諸語を東・西・南・北の四つのグループに分けた。その際、ボージュプリー語などはヒンディー語の東部方言という言い方はそのまま、ベンガル語やオリヤー語とともに、東のグループに分けられた。Grierson (1903) は基本的にはそれを踏襲する形で、ヒンディー語東部方言という言い方をビハール語(Bihari)に改め、ここにビハール語という名称が使われるようになったのである。

グリヤソンの LSI (= Linguistic Survey of India) 第 5 巻によると、「ビハール語は正しくビハール地方の言語を意味し、その地方のほぼ全域で話されている」(1 頁)と定義され、ビハール語の方言として、次のように述べている(3-4 頁)。

“Bihārī has three main dialects, Maithilī or Tir<sup>a</sup>hutiā, Magahī, and Bhojpurī. Each of these has several sub-dialects. The three dialects fall naturally into two group, viz. Maithilī and Magahī on the one hand, and Bhojpuri on the other. The speakers are also separated by ethnic peculiarities, but Magahī and Maithilī and the speakers of these two dialects, are much more closely connected together than either of the pair is to Bhojpurī. Magahī, indeed, might very easily be classed as a sub-dialect of Maithilī, rather than as a separate dialect.”

このグリヤソンが提唱したインド・アリア語分類の中で、ビハール語が占める位置

についていえば、チャテルジーはそのまま継承した形で分類しており、グリヤソンの東グループが Māgadhī Apabhraṃśa に遡れることからマーガデー諸語 (Magadhan Speeches) と呼び、次のように分類している (Chatterji 1926 : 92)。

1. Eastern Magadhan : Bengali, Assamese, Oṛiyā.
2. Central Magadhan : Maithilī, Magahī
3. Western Magadhan : Bhōjpuriyā, with Nāgpuriyā or Sadānī.

ただし、この分類をみてわかるように、チャテルジーはグリヤソンがビハール語としてまとめた 3 言語を二つに分けたこと、サダーニー語 (ナーグプリー語) をボージュプリー語のグループに加えたことがグリヤソンと異なる。またチャテルジーの指摘以後、ビハール語を通時的な意味で上にあげた 3 言語の祖語という単一言語と考えるグリヤソンの分類は通用しなくなった。つまり、この Bihāri という名称がその後も使われてはきたが、それはただ便宜上、ビハール州のインド・アーリア諸語という意味で使われたに過ぎない。したがって、グリヤソンが 'the language of Bihar' (Grierson 1903 : 1) と単数で表したビハール語という言い方は姿を消し、最近ではこれら 3 言語をまとめて、the Bihāri languages (Shapiro & Schiffman 1981 : 81) 「ビハール諸語」と呼ばれる程度である。

さらに、ティワーリーはあきらかにグリヤソンの単一言語の 3 方言という見方に異議を唱えている。

"their speeches are not so much dialects of a common language (there is no common literary form for the basic Bihāri) but as independent speeches capables of independent employment in literature" (Tiwari 1960 : xxi)

すなわち、この 3 言語を共通の単一言語の諸方言とみなすのではなく、独立の言語 (ティワーリーは speeches を同じ頁の 4 行下で languages と言い替えているので、『言語学大辞典』が訳すような「言葉」の意味ではない) と見なすようにと述べている。またティワーリーは分類についても、グリヤソンとは異なり、上のチャテルジーの分類をそのまま引用し (Tiwari 1960 : xl-xliii), 表だけでなく、それぞれのマーガデー諸語の特徴について 2 頁にわたって Chatterji (1926 : 92-96) を引用している。

ここまで見てくると、『言語学大辞典』の記述はかなり問題である。グリヤソンについては問題ないが、ティワーリーはグリヤソンに反対し、チャテルジーを引用しているし、チャテルジーは「マガヒーはマイティリーの下位方言にすぎないとした上で、マイティリーそのものが言語か方言かを明示しない立場」(『言語学大辞典』) をとっているとは、Chatterji (1926) からはとても読み取れない。上に LSI から英文で引用したうちの下線部

をみればわかるように、マガヒーをマイティリーの下位方言とみなしたのはむしろグリヤソンである。

その後のインド・アリア諸語の研究をみていくと、ビハール諸語内部の分類よりも、むしろインド・アリア諸語を分類する際、ビハール諸語をどのグループに分類するのかという問題が起きてくる。というのは分類の規準(criteria)の問題で、Cardona(1974)は従来通時的な視点から分類されてきたのを、共時的な視点を導入し、ビハール州の公用語がヒンディー語であることから、ビハール諸語をヒンディー語と同じグループにいれ、中部グループ(Midland group)と呼んでいる。こうしたインド・アリア諸語の分類については、その分類の規準に関わる問題<sup>1)</sup>である以上、今後ともいろんな説が出てくる可能性がある。

以上、『言語学大辞典』の記述から出発し、実際の文献にあたり簡単に研究小史としてまとめたが、この記述は残念ながらかなり疑わしい。しかしながら、いわゆるビハール語を「単一言語の3方言」(グリヤソン)とする学説は消え去ったわけではなく、その学説を中心に次章で検討してみよう。

## 2. 伝統的系統論によるビハール語

このグリヤソンの学説を、伝統的な系統論の立場から論証しようとしたのが、Jeffers(1976)である。

Jeffers(1976)は音韻変化の規則性と共通の改新(Shared Innovation)に目をつけて、まずベンガル語、オリヤー語、アッサム語とビハール諸語の音韻体系をみると、共通の改新が見られないとして、これらを東部インド・アリア語とまとめることができないことを指摘した(p. 221)。一方、ビハール諸語は共通の改新をもっているため、ビハール諸語はビハール祖語から分かれたものであり、ビハール諸語のうち、マイティリー語とマガヒー語が別の共通の音韻改新をもつことから、これら2言語とボージュプリー語はビハール祖語からさらに分岐したと結論づけている(p. 224)。

しかし、Jeffers(1976)のあげる共通の音韻改新を注意深くみていくと、必ずしもビハール諸語だけの特徴とは言えない。Jeffers(1976: 221-222)があげた共通の改新は、(1)サンスクリット語から、ビハール祖語への音韻変化として、-l- > -r-(2)サンスクリット語のアクセント直前の長母音がビハール祖語で短母音化すること(3)ビハール祖語が古インド・アリア語の語末の母音を保持していること、ただしボージュプリー語はビハール祖語から分かれて後、語末の母音が落ちたの3点である。Jeffersがあげたそれぞ

れの例をみて、この3つの共通の改新がはたして起きたのか、検討してみよう。

(1) 表Ⅲ. 2 にあげられた例を、CDIAL (= A Comparative Dictionary of the Indo-Aryan Languages) の関連のある語例とくらべてみよう。

Skt. *p<sup>h</sup>ala* 'fruit' > Mth. Mag. *p<sup>h</sup>ara*, Bhoj. *p<sup>h</sup>ar*, Hin. Beng. Ass. *p<sup>h</sup>al*, Or. *p<sup>h</sup>ala* ;

(CDIAL 9051 Mth. *p<sup>h</sup>ar*, Bhoj. *p<sup>h</sup>ar*, OAw *p<sup>h</sup>ara*, Or. (Bastar) *p<sup>h</sup>ara*.)

Skt. *p<sup>h</sup>āla* 'ploughshare' > Mth. Mag. *p<sup>h</sup>āra*, Bhoj. *p<sup>h</sup>ār*, Hin. Beng. Ass. *p<sup>h</sup>āl*, Or. *p<sup>h</sup>āla* ;

(CDIAL 9072 Mth. *p<sup>h</sup>ār*, *p<sup>h</sup>ārā*, *p<sup>h</sup>ālā*, Or. (Bastar) *p<sup>h</sup>āra*.)

Skt. *hala* 'plow' > Mth. Mag. *hara*, Bhoj. *har*, Hin. *hal*, Beng. *hala*, Or. *haḷa* ;

(CDIAL 14000 Mth. Bhj. Aw. lakh. *har*, B. *hal*.)

Skt. *kalaya* 'kind of pea' > Mth. *karāi* Hin. *kalāi*, Beng. *kalāi*, Ass. *kalāi*, Or. *kaḷa* ;

(CDIAL 2932 Skt *kalāya* Mth. *karāi*, *kalāi*, Hin. *kalāi* 'pulse', *karāyī* 'pod of a white pea'.)

Skt. *saivāla* 'waterweed' > Mth. *semāra*, Mag. *sewār* (borrowing) Bhoj. *sewār*, Beng. *seyālā*, Ass. *xelāi* ;

(CDIAL 12493 Skt. 1. *śīpāla*- 'the waterweed', 2. *śēvāla* 'the plant', 1. Hin. *siwār* 'a green slimy waterweed', Or. *siuḷi* 'species of algae, moss', 2. Mth. *semār*, Bhoj. Aw.lakh. *sewār*, Beng. *seyālā*, *seolā*, Ass. *xelāi*.)

表Ⅲ. 2 だけをみると、サンスクリット語 (Skt.) の母音間-l がマイティリー語 (Mth.) とマガヒー語 (Mag.), ボージュプリー語 (Bhoj.) で -r (-) に、ヒンディー語 (Hin.), ベンガル語 (Beng.), アッサム語 (Ass.) では -l に、オリヤー語 (Or.) では -l̥ にそれぞれ変化しているように見える。ところが、CDIAL とくらべてみると、Jeffers の記述がかなりあやしくなってくる。まずサンスクリット語とベンガル語の語形にあきらかな誤植がある。サンスクリット語 *kalaya* は *kalāya*, *saivāla* は *śaivāla* の誤りで、ベンガル語の *hala* は *hal* の誤りである。また Jeffers の主張の中心を占める Skt. -l が -r (-) に変化した例として、オリヤー語バスタル方言 (Or. Bastar) *p<sup>h</sup>ara* 'fruit' *p<sup>h</sup>āra* 'ploughshare' や古アワディー語 (OAw.) *p<sup>h</sup>ara* 'fruit', アワディー語ラクナウ方言 (Aw. lakh.) *har*, *sewār* にみられる。さらに、マイティリー語でも、方言差なのか、異形態なのか、そのまま -l が保存された例が CDIAL にはみられるし (*p<sup>h</sup>ār*, *p<sup>h</sup>ārā*, *p<sup>h</sup>ālā* ; *karāi*, *kalāi*)、最後の2例はヒンディー語でも -r に変化した語形 (*karāyī*, *siwār*) がある。これではとてもビハール諸語だけの特徴とは言い難い。

(2) Jeffers (1976 : 221-222) には例がないが、表Ⅱ. 1 の Skt. *āb<sup>h</sup>īra* 'cowherd' > Mth. *ahīra* を検討すると、マイティリー語の語中の -ī- にアクセントが落ちるので、サンスク

リット語の長母音を保持したが、サンスクリット語の語頭の ā-はアクセントの直前なので、マイティリー語では短母音 a-となったというのが、Jeffers の主張であると考えられる。しかし、この例についても CDIAL をみると Jeffers の主張は支持し難い。

CDIAL 1232 Bhoj. Aw. *ahir*, Hin. *ahīr*, Beng. *āhir*, Or. *āhira*

確かに、同じ東部グループに入っているベンガル語やオリヤー語では語頭の長母音は保持されているが、語中の長母音は短母音化している。同じビハール諸語のボージュプリー語では、ビハール諸語ではないがビハール諸語と隣接しているアワディー語とともに、語頭、語中ともに短母音化している。マイティリー語は語末の母音が落ちるか、保持するかの違いはあっても、母音の長短に関して言えばヒンディー語の語形と一致する。この(2)の規準をビハール諸語の共通の特徴とするにはさらなる語例が必要である。

(3)については、表Ⅲ. 3に例があげられている。CDIAL から語例をあげてくらべてみよう。

Skt. *g<sup>h</sup>arma* 'heat' > Mth. *g<sup>h</sup>āma*, Hin. *g<sup>h</sup>ām*, Beng. *g<sup>h</sup>ām* ;

(CDIAL 4445 Mth. *g<sup>h</sup>ām* 'sweat', Bhoj. Aw. lakh. *g<sup>h</sup>ām* 'sunshine, heat of the sun', Hin. *g<sup>h</sup>ām* 'heat, sunshine, sweat', Beng. *g<sup>h</sup>ām* 'sunshine, sweat', Ass. *g<sup>h</sup>ām* 'heat, sweat'.)

Skt. *vārt (t)ā* 'business' > Mth. *bāta*, Hin. *bāt*, Beng. *bāt* ;

(CDIAL 11564 Mth. Bhoj. Aw. lakh. Hin. Beng. Or. *bāt*.)

Skt. *saptati* 'seventy' > Mth. *sattari*, Hin. *sattar*, Beng. *satter*

(CDIAL 13143 Bhoj. Aw. lakh. *sattari*, Hin. Beng. *sattar*, Ass. *xatari*, Or. *satori*.)

Skt. *śvaśrū* 'mother-in-law' > Mth. *sāsu*, Hin. *sās* Beng. *sās*

(CDIAL 12759 Mth. *sāsu*, Bhoj. *sāsu*, OAw. *sāsu*, Hin. *sās*, *sāsū*, Beng. *sās*, *sāsuri*, Ass. *xāhu*, Or. *sāsu*.)

上の例から言えることは、最初の2例についてははたしてマイティリー語は語末の母音を保持しているのかどうかということ、後の2例についてはマイティリー語ばかりでなく、他の東部インド・アーリア語に属するオリヤー語やアッサム語でも語末の母音は保持されていることの2点につきる。

マイティリー語が語末の母音を保持することは古くから知られており、Grierson (1909 : 4) は Sindhī や Kāsmīrī と比較しているし、Chatterji (1926 : 150-152) は Orīyā, や certain forms of Eastern Hindī and Western Hindī でも語末の母音が保持されることを指摘している。また個々の言語については、オリヤー語については Majumdar (1970) に、コンカニー語については Katre (1966) に詳しい語例がみられる。Masica (1991) によると、

語末の母音を保持しているのは, Konkani (southern dialect only), Sindhi, Oriya, Maithili, Awadhi, rustic dialects even of Western Hindi (Braj, Kauji) で, 'Different vowels are preserved in different languages, in different functions, and to different degrees.' (p. 196) と述べている。これでこの規準がビハール祖語を再構するために, 全く意味がないことがはっきりしたと思う。

以上, Jeffers があげたビハール祖語を再構するための規準が, どれ一つとして, ビハール諸語だけに共通したものでないことが十分わかったはずである。むしろ, この3つの規準を厳密に当てはめようとする, 従来東部ヒンディー語群に数えられているアワディー語をビハール祖語から分かれたと考えなくてはならず, ビハール諸語やベンガル語などが Magadhī Apabhraṃśa から分岐したという歴史的事実と異なってしまうことになる。

Jeffers の努力にもかかわらず, マイティリー語, マガヒー語, ボージュプリー語が共通のビハール祖語から分岐したという仮説はどれも成り立たないようである。すなわち, 歴史的にビハール祖語という名の単一言語の想定はどうやら無理のようである。

### 3. 共通語としてのビハール語

それでは「ビハール語」というのは言語学的にはまったく実体のない言語なんだろうか。筆者の観察によると, 決してそうではない。ビハール州の公用語は標準ヒンディー語であるが, 口語レベルでは標準ヒンディー語とは違うビハール州に広がっている共通語がある。現在の州首相もこれを話し, マスコミは 'Bhojpurized Hindi' などと呼んでいるが, これこそ筆者がラーンチー市(ビハール州南部)でよく耳にする言語で, 筆者はこれを共通ビハール語と呼びたい。また, この共通ビハール語は標準ヒンディー語の文法を簡略化した言語で, その意味ではいわゆる Bāzār Hindī と似ているのである。

すでにヒンディー語地域といっても, いろんなレベルで異なった言語が話されていることはよく知られている。インドの社会言語学を切り開いた Gumperz (1957a,b) によると, ヒンディー語地域と一口に言っても, 村レベルの地方方言 the local village form of dialect (Gumperz 1971 : 4) と標準ヒンディー語の間にはかなりの相違があり, その中間に地方の共通語 regional standards (Gumperz 1971 : 15) と呼ばれる言語(例えば, マイティリー語やボージュプリー語)が存在することを指摘した。さらに, Gumperz & Naim (1960) はそれぞれの地方の共通語を母語とする人々が標準ヒンディー語を話すときに, 標準ヒンディー語とは音韻論的に異なる変異を示すことを論証している。しかし, Gumperz は Bāzār Hindi とか Bāzār Hindustani と呼ばれる言語の存在は指摘しつつも, これ

を地方の共通語と同じレベルでは論じていない。一方、これまでの Bāzār Hindī の研究はいろんな母語話者が集まる大都市についての研究しかなかった。例えば、Chatterji (1931) はカルカッタのヒンドゥスターニー語<sup>2)</sup>を a Jargon Dialect として記述しているし、Apte (1974) はボンベイで話されているヒンディー・ウルドゥー語を Pidginization of a Lingua Franca として記述している。ここで使われている Jargon や Pidginization というのはほとんど同じことをいっているが、社会言語学的发展と共に用語が変わってきたという経緯がある。

ブルームフィールドの『言語』は、1950年代までは最も影響力のあった言語学の概説書であるが、Chatterji (1931) のいう Jargon を次のように定義している。Jargon とは下位言語の話手が優位言語を学ぶにあたり、上位言語の簡単化された「赤ん坊ことば」を習得し、それが広がったもの(630-631頁)とみなしている。しかし、こうした優位言語・下位言語という考え方が駆逐されるとともに、ブルームフィールドが定義づけたジャーゴンという使い方は姿を消し、最近ではピジン英語にちなんで、ピジンという言語学用語が使われるようになった。ピジンとは、「共通語をもたない人々の間に起こる、ある限られたコミュニケーションの必要を満たすために生まれる周辺的な言語」(トッド1986: 5)で、ピジン化とは「文法構造や語彙、文体が元の言語と比べて、簡略化されること」(Crystal 1985: 234)と定義づけられている。さらに、ピジンが母語化したものをクレオールと呼び、こうした異なる言語の接触によって、新しく生まれる言語の研究をピジン・クレオール研究と呼んでいる。この研究が盛んになったのはそう古いことではなく、せいぜい Hall (1966) が出版されて以後のことである。

ところが最近、社会言語学の研究の中から、ピジン化やクレオール化以外に、コイナー化という用語が導入されるようになった。コイナーとはもともとは西暦紀元最初の数世紀において勢力のあったギリシャ語の標準語である。このコイナーにちなんで、Siegel (1985: 375-376) は次のように、コイナー化(Koineization)を定義している。

“Koineization is the process which leads to mixing of linguistic subsystems, that is, of language varieties which either are mutually intelligible or share the same genetically related superposed language. It occurs in the context of increased interaction or integration among speakers of these varieties. A koine is the stabilized composite variety which results from the contributing varieties, and at an early stage of development, it is often reduced or simplified in comparison to any of these varieties. Functionally, a koine served as a lingua franca among speakers of the different varieties. It also may become the pri-



mary language of amalgamated communities of these speakers”

要約すると、お互いに通じる言語同士や系統を同じくする言語同士が接触し、それを同化させようとする事でコイナー化は起き、しばしば簡略化を伴う。こうしてできたコイナーはリング・フランカとしての役割を担い、徐々に主要言語となっていく。これから明らかなように、筆者の提唱する共通ビハール語の成立に関わったと思われる標準ヒンディー語とボージュプリー語などいわゆる「ビハール諸語」はお互に通じるし、もちろん系統関係も同じ印欧語族のインド語派に属し、標準ヒンディー語と「ビハール諸語」の接触の結果、コイナー化が起り、そして生まれたコイナーが筆者のいう共通ビハール語であると考えられる。

実はこのコイナー研究の多くはインド人が移住によって、どう言語を変化させたかという研究によって発展してきた。例えば、Gambhir (1981, 1988) のガイアナ・ボージュプリー語、Siegel (1975, 1988) のフィジー・ヒンドゥスターニー語、Mohan (1978) のトリニダードのボージュプリー語、Mesthrie (1993) の南アフリカのボージュプリー語など。ところが、インド国内でこうしたコイナーの報告はコイナーという社会言語学用語が定着する以前の、上にあげたカルカッタ (Chatterji 1931) とボンベイ (Apte 1974) のケースだけで、Gambhir (1983) は Chatterji (1931) を引用して、Calcutta Bazaar Hindustani をコイナーとみなしている。

#### 4. 共通ビハール語の記述

では最後に、共通ビハール語の記述を試み、実例を挙げて文法の簡略化を検証してみたい。ただし音論についてはかなりのヴァリエーションが見られるので省き、コイナー化に最も特徴的な形態論を中心に述べる。また紙幅の関係で、共通ビハール語と標準ヒンディー語の異なる点を中心に述べるにとどめる。

まず名詞についてみていこう。なお略語は、H = 標準ヒンディー語、B = 共通ビハール語で、ここで記述する共通ビハール語は筆者が観察し、インフォーマントに確認した文例である。

(1) 標準ヒンディー語にある文法性 (Grammatical Gender) による呼応がない。つまり、標準ヒンディー語では名詞の性に呼応して、後置詞 (kā, kī) 'of' や形容詞 (acc<sup>h</sup>ā, acc<sup>h</sup>ī) 'good' が変化するが、共通ビハール語では無変化である。

H.	rām kā b <sup>h</sup> āī	'Ram's brother',	rām kī bahin	'Ram's sister'
B.	rām kā b <sup>h</sup> āī	'Ram's brother'	rām kā bahin	'Ram's sister'

H.	acc <sup>h</sup> ā laṛkā	'a good boy'	acc <sup>h</sup> ī laṛkī	'a good girl'
B.	acc <sup>h</sup> ā laṛkā	'a good boy'	acc <sup>h</sup> ā laṛkī	'a good girl'

ただし、上の laṛkā / laṛkī のように、語彙のレベルで実際の性(Natural Gender)によって語尾が男性(雄)-ā 女性(雌)-ī に変わるのと同じである。

(2) 標準ヒンディー語にある語尾変化による複数形がなく、共通ビハール語では特に複数を表したいときには log(人間) または sab(物など) を名詞の後に付ける。したがって、上にあげた後置詞や形容詞も呼応しない。また標準ヒンディー語にある語尾変化による斜格形も普通はないが、語尾に -ī をもつ名詞と語尾が子音で終わる名詞の斜格形のみ、標準ヒンディー語と同じ -iyō / -ō となる。

H.	rām ke b <sup>h</sup> āī	'Ram's brothers'	rām kī bahinē	'Ram's sisters'
B.	rām kā b <sup>h</sup> āī log	'Ram's brothers'	rām kā bahin log	'Ram's sisters'
H.	acc <sup>h</sup> e laṛke	'good boys'	acc <sup>h</sup> ī laṛkiyā	'good girls'
B.	acc <sup>h</sup> ā laṛkā log	'good boys'	acc <sup>h</sup> ā laṛkī log	'good girls'
H.	acc <sup>h</sup> e laṛkō ko	'to the good boys'	acc <sup>h</sup> ī laṛkiyō ko	'to the good girls'
B.	acc <sup>h</sup> ā laṛkā(logō) ko	'to the good boys'	acc <sup>h</sup> ā laṛkiyō ko	'to the good girls'

こうした名詞の曲用の簡略化は、Chatterji(1931 [1972] : 228-233) の記述するカルカッタ・バーザール・ヒンドゥスターニー語とほとんど同じである。また、次に述べる代名詞についても、共通ビハール語はカルカッタ・バーザール・ヒンドゥスターニー語と同様である。

(3) ビハール語の人称代名詞を一覧表にして、標準ヒンディー語とくらべてみよう。

	H.		B.	
	Singular	Plural	Singular	Plural
1 st Person	maī	ham	ham	ham log
2 nd Person	tū	tum	tum	tum log
(Honorific)		āp	āp	āp log
3 rd Person	vah / yah	ve / ye	ie / uo	ie log / uo log

これ以外にもかなりの違いがある。例えば、標準ヒンディー語では一人称単数形の曲用(主格, 斜格, 対格, 属格 maī, muj<sup>h</sup>, muj<sup>h</sup>e, merā)があるが、これらは全く共通ビハール語では用いられない。またその他の人称代名詞でも、標準ヒンディー語では属格の語尾が後に来る名詞の数や性によって変化したり hamārā / -rī / -re, 与格形 hamē をもつが、この語尾変化はないし、与格形もない。つまり、代名詞も名詞と同様、曲用の簡略化がお

こっている。

ところで、この一人称単数に ham を使うのはいわゆる「ビハール諸語」の特徴で、ボージュプリー語もマイティリー語も ham を使う (Masica 1991: 252)。ところが、ラーンチー周辺で話されているサダーニー語では一人称単数は moë (Jordan-Horstmann 1969: 65) である。このことから言えるのは、共通ビハール語の成立にサダーニー語は関与せず、共通ビハール語が北ビハールで成立してから南ビハール、すなわちサダーニー語地域に広まったのではないかと考えられる。

カルカッタ・バーザール・ヒンドゥスターニー語にもない共通ビハール語の特徴は動詞の語尾変化である。前者は普通、主語の性や数と一致して動詞を語尾変化させることはないが、後者は標準ヒンディー語と比べれば簡略化されているものの動詞の語尾変化が起こる。共通ビハール語について、具体的な例をあげてみよう。

(4) 二人称単数形の tum が主語のときには動詞語尾は主語の性に一致して変化する。つまり、「おまえ」と指された人が女性ならば動詞語尾は -ī で、男性ならば -ā である。この一致の仕方は標準ヒンディー語の一人称単数形と三人称単数形と同じである。また、三人称単数の場合は共通ビハール語も同じで、動詞語尾は主語の性に一致する。さらに、標準ヒンディー語では tum に対する honā 動詞は ho という形をとるが、共通ビハール語では hai である。

H.	tum jāte ho	'You go'
	vah jātā/jātī hai	'He / She goes'
B.	tum/vah jātā/jātī hai	'You / He (She) go (es)'

(5) 標準ヒンディー語では他動詞が過去分詞形をとるとき、主語は後置詞 ne をとり、動詞は目的語の性に一致する能格構文がある。これに対し、共通ビハール語は後置詞 ne をとらないし、動詞はたえず主語に一致する。なお、共通ビハール語の動詞の語尾変化は ham, āp が主語の場合、ham/āp jāte hai 'I/You (honorific) go' と変化する。つまり、一般動詞では -ā/-ī/-e の 3 形があり、honā 動詞では hai/haī の 2 形がある。さらにつけ加えると、(1) で述べたように、文法性がないので、無生名詞 (inanimate nouns) が主語の場合には、常に動詞語尾は無標である -ā と hai がくる。

H.	maī-ne kitāb paṛ <sup>h</sup> ī	'I read the book'
B.	ham kitāb paṛ <sup>h</sup> e	'I read the book'
H.	b <sup>h</sup> īṛ hotī hai	'It is crowd'
B.	b <sup>h</sup> īṛ hotā hai	'It is crowd'

最初の例文を説明すると、標準ヒンディー語の能格構文では主語は後置詞-ne をとり、動詞は目的語の性に一致すると述べたが、ここでは主語 māī は確かに-ne をとり、また目的語 kitāb 'book' が女性名詞なので、動詞語尾-ī をとっている。一方、共通ビハール語では後置詞-ne もとらないし、動詞は主語 ham に一致して、動詞語尾-e をとっている。また、後の例文では主語である b<sup>h</sup>īr 'crowd' は女性名詞なので、標準ヒンディー語では hotī hai と主語の性に一致して変化しているが、共通ビハール語では女性名詞が主語の場合でも、男性名詞が主語の場合と同じ語尾 hotā hai をとる。

この過去分詞構文で動詞が主語と一致するのはカルカッタ・バーザール・ヒンドゥスターニー語にもなく、共通ビハール語独自の特徴のように思われる<sup>3)</sup>。

以上、簡単に共通ビハール語の特徴をみてきたが、明らかに標準ヒンディー語にくらべ、著しい簡略化がみられる。そして、この共通ビハール語は単にリング・フランカの役目を果たしているだけではない。ムンダ語やクルク語など、もともと少数民族の言語を母語とする人たちが母語を捨て、「ヒンディー語」と称する言語を家庭で使用しているケースをみると、このいわゆる「ヒンディー語」とは筆者の言う共通ビハール語である。したがって母語化も進んでいる。また共通ビハール語の成立の歴史を振り返ってみると、カルカッタ・バーザール・ヒンドゥスターニー語のように、動詞の語尾変化についてももっと簡略化されたものであったのが、教育の普及とともに、もう少し複雑化したのかもしれない。いましゃべられている共通ビハール語がこのまま安定した状態で、政治的に「共通ビハール語」として認知されるのか、それとは逆にますます標準ヒンディー語化し複雑化するののかは、言語学の問題というよりも政治的な問題であるが、いずれにせよ、社会言語学にとって共通ビハール語はなかなか興味深いテーマのように思われる。

### おわりに

『言語学大辞典』のビハール語の記載を出発点に、これまでの研究を概観し、グリヤソンのいう「一つのビハール語に三つの方言」説が Jeffers (1976) の努力にもかかわらず、言語学的にはまったく意味をもたないことがはっきりしたと思う。一方、筆者が提示したコイネー・ビハール語説はまったくの新説で、小論を機に多くの方々から御教示、御批判を受けたいと思う。日本ばかりでなく、世界的にみても、サンスクリット研究の膨大な積み重ねに対し、現代インド・アリア諸語の研究はまだ未開拓の分野である。小論がこうした未開拓分野への興味への糸口となれば、小論の目的は十二分に達せられることになる。小論が現代インド・アリア諸語、とりわけ「ビハール諸語」の研究の道しるべ

となることを祈願してペンを置く。

## 注

- 1) Masica(1991:446-463)はこれまでの現代インド・アリア諸語の分類を紹介し、分類の決定が数多くある規準のうち、どの規準を優先させるかによってなされていることを指摘している。原文は以下の通り。“A taxonomic decision thus appears to have to rest on giving priority to some criteria over others”(p.456).
- 2) ヒンディー語とウルドゥー語は口語のレベルではほとんど同一の言語と呼べるが、こうした共通部分をヒンドゥスターニー語と呼ぶ。また両者をまとめて、Kelkar(1968)はヒルドゥー(Hirdu)と呼ぶ提案をしたが定着せず、言語学の最近の論文ではHindi-Urduと併記するケースが多い。
- 3) Chatterji(1969:258-266)はローマ字使用の汎インド共通ヒンディー語を提唱し、これを公用語と認めるように主張し、それをBasic Hindiと呼んでいる。そのBasic Hindiもこうした動詞語尾変化がない。過去分詞構文で動詞が主語と一致するのはコイナー・ビハール語の指標となる特徴であると思われる。

[謝辞] 草稿の段階で京都大学留学生センター助教授家本太郎氏と京都大学文学部助手高橋慶治氏から貴重なコメントを頂きました。ここに記して両氏への感謝の意としたい。

## 参考文献

Apte, Mahadev L.

1974 Pidginization of a Lingua Franca : a Linguistic Analysis of Hindi-Urdu spoken in Bombay. *International Journal of Dravidian Linguistics*, 3 : 21-41.

Barz, Richard K. and Jeff Siegel (eds.)

1988 *Language Transplanted : The Development of Overseas Hindi*. Wiesbaden.

Beams, John

1867 *Outlines of Indian Philology and Other Philological Papers*. Reprint in 1971. Calcutta.

Blain, E.

1975 *English-Sadri Dictionary*. Jharsuguda (India).

Bloomfield, Leonard (三宅鴻・日野資純共訳)

1933, 1935 『言語』. 大修館書店(1970).

Cardona, George

1974 The Indo-Aryan Languages, *Encyclopaedia Britannica*. Vol. 9 : 439-450.

Chatterji, Suniti Kumar

- 1926 *The Origin and Development of the Bengali Language*. 2 Volumes. Reprint in 1970. London.  
 1931 Calcutta Hindustani—A Study of a Jargon Dialect, Chatterji (1972) 294-256.  
 1969 *Indo-Aryan and Hindi*. Calcutta.  
 1972 *Select Papers*. Vol. 1. New Delhi.

Crystal, David

- 1985 *A Dictionary of Linguistics and Phonetics*. 2nd Edition. Oxford.

Gambhir, Surendra K.

- 1981 *The East Indian Speech Community in Guyana : a Sociolinguistic Study With Special Reference to Koine Formation*. Unpublished Ph.D. Dissertation, University of Pennsylvania.  
 1983 Two Koinés Compared : Guyanese Bhojpuri and Calcutta Bazaar Hindustani. *International Journal of Dravidian Linguistics*, 12(2) : 471-480.  
 1988 Structural Development of Guyanese Bhojpuri, Barz & Siegel (eds.) 69-94.

Grierson, G. A.

- 1903 Indo-Aryan Family Eastern Group, Part III Bihārī & Oriyā Languages, *Linguistic Survey of India*. Vol. V. Reprint in 1968. Delhi.  
 1909 *Introduction to the Maithilī Dialect of the Bihārī Language as spoken in North Bihār*. Calcutta.

Gumperz, John

- 1957a Some Remarks on Regional and Social Language Differences in India, Gumperz (1971) 1-11.  
 1957b Language Problems in the Rural Development of North India, Gumperz (1971) 12-24.  
 1971 *Language in Social Group*. Stanford.

Gumperz, J. and C.M. Naim

- 1960 Formal and Informal Standards in Hindi Regional Language Area, Gumperz (1971) 48-76.

Hall, Robert A. Jr.

- 1966 *Pidgin and Creole Languages*. Cornell University Press.

Hoernle, A. F. R.

- 1880 *A Comparative Grammar of the Gaudian Languages, With Special Reference to the Eastern Hindi*. Reprint in 1975. Delhi.

Jeffers, Robert J.

- 1976 The Position of the Bihārī dialects in Indo-Aryan, *IJL*, 18 : 215-225.

Jordan-Horstmann (Thiel-Horstmann), Monika

- 1969 *Sadani : A Bhojpuri Dialect Spoken in Chotanagpur*. Wiesbaden.

亀井孝・河野六郎・千野栄一

1988-1993 『言語学大辞典 世界言語編(上・中・下1・下2・補遺)』. 三省堂.

Katre, S. M.

1966 *The Formation of Konkani*. Poona.

Kelkar, Ashok R.

1968 *Studies in Hindi-Urdu I*. Poona.

Kellogg, S. H.

1875 *A Grammar of the Hindi Language*. Reprint in 1965. London.

Majumdar, Paresh Chandra

1970 *A Historical Phonology of Oriyā*. Calcutta.

Masica, Colin P.

1991 *The Indo-Aryan Languages*. Cambridge University Press.

Mesthrie, Rajend

1993 Koineization in the Bhojpuri-Hindi Diaspora : With Special Reference to South Africa, *International Journal of the Sociology of Language*, 99 : 25-44.

Mohan, P.

1978 *Trinidad Bhojpuri : A Morphological Study*. Ph. D. Dissertation, University of Michigan.

Shapiro, Michael C. and Harold F. Schiffman

1981 *Language and Society in South Asia*. Delhi.

Siegel, Jeff

1975 Fiji Hindustani, *University of Hawaii Working Papers in Linguistics*, 7 (3) : 127-144.

1985 Koines and Koineization, *Language in Society*, 14 : 357-378.

1988 The Development of Fiji Hindustani, Barz & Siegel (eds.) 121-150.

1993 Introduction : Controversies in the Study of Koines and Koineization, *International Journal of the Sociology of Language*, 99 : 5 - 8 .

Tiwari, Udai Narayan

1960 *The Origin and Development of Bhojpuri*. Calcutta.

Todd, Loreto. (田中幸子訳)

1974 『ピジン・クレオール入門』. 大修館書店(1986).

Turner, R. L.

1966 *A Comparative Dictionary of the Indo-Aryan Language (= CDIAL)*. Oxford.